

MRI 拡散強調画像で両側皮質に異常高信号を認め、 経時的変化を評価し得た低血糖脳症の1例

かど わき ひで かず やま ぐち しゅう へい
門 脇 秀 和¹⁾ 山 口 修 平²⁾

キーワード：低血糖脳症，頭部 MRI 拡散強調画像，高齢者，脳血管障害

要 旨

問診上18時間以上の低血糖状態があったとされる，88歳女性の低血糖脳症を経験した。搬送時，意識レベルは JCS 300，左上下肢の間代性痙攣を認めた。血糖値は 17 mg/dL，ブドウ糖 40 g の静脈投与にて血糖は正常化したものの，舌根沈下と意識レベルは改善せず，入院後16日間の挿管と25日間の抗痙攣剤の投与を必要とした。第17病日には意識レベルが改善し，抜管を実施，第26病日には経口摂取を開始し，第35病日には完全経口摂取が可能となった。入院時の頭部 MRI 拡散強調画像で，両側の運動前野を中心に前頭頭頂皮質に異常高信号を認めた。第10病日の頭部 MRI では高信号の消失傾向を認め，第30病日に追跡した頭部 MRI では異常高信号が消失した。

低血糖脳症では，急性期脳血管障害と類似の臨床所見を呈することもあり，本症例のごとく高齢者の意識障害や痙攣の症例では，本疾患の存在を疑って対応する必要がある。

はじめに

低血糖で搬送された症例の中に，頭部 MRI 拡散強調画像にて異常高信号を認める症例が報告されている¹⁻⁶⁾。また，低血糖脳症は初診時に，昏睡・意識障害のみならず，片麻痺のような脳血管障害を示唆する臨床症状を呈することも報告されている^{1,3,7)}。頭部 MRI の異常所見と低血糖脳症の予後に関する考察はなされているが，予後を確

定する因子や画像所見の明確な指標は示されていない^{9,10)}。

今回我々は，両側の大脳皮質に高信号を認めた症例を経験した。入院時，第10病日および第30病日に頭部 MRI 所見の経時的変化を評価し得たので，報告する。

症 例

88歳女性，右利き。活発な女性で，刺繍や散歩を趣味としている。肥満症 (BMI=25.6 kg/m²)，高血圧症，リウマチ性多発筋痛症に対して数年来内服しているプレドニゾロン 7.5 mg によるステ

Hidekazu KADOWAKI et al.

1) 島根県済生会江津総合病院内科

2) 島根大学医学部附属病院内科学第3

連絡先：〒695-8505 江津市江津町1016-37